秦始皇帝長城伝説とその舞台

——秦碣石宮と孟姜女伝説をつなぐもの——

鶴間和幸

はじめに

河北省秦皇島市の東北、遼寧省との省境近くの望夫石村に孟姜女の廟がある。この廟は明代長城の山海関の城壁から六キロ東北外に出た鳳凰山の頂に位置する。そしてそこからまた東南八キロの渤海の海上には、姜女墳または姜女石という名の孟姜女の墓と伝える岩礁がある。孟姜女とは伝説では秦始皇帝時代の女性であり、新婚まもないときに夫を長城建設の労働に駆り出され、安否を心配して長城に赴いたが、すでに長城建設の労苦に倒れたことを知って号泣したところ、崩れた長城のなかから夫の遺骨を見つけて持ち帰ったという悲劇のヒロインである。しかしこの孟姜女の廟は明代の長城の位置にあって、秦代の長城ははるか北方にあったことからも、この伝説が秦の時代に生まれたものではないことは明らかである。秦とは直接関係のない後世の伝説として秦史を語る材料とはなりえなかった。

ところが、一九八二年、この海上の姜女石と向かい合わせの海岸一帯で秦漢時期の大型離宮群の遺構が発見され、

事態は大きく変わった。後世の孟姜女廟が秦長城とは関係がないにしても、秦漢時期の離宮の位置にあることがわかったからである。本稿の目的は、長城伝説から孟姜女伝説に至る展開を整理し、後世の伝説のなかから秦代の史実を読みとっていこうとするものである。すでに筆者は漢代画像石を用いて秦始皇帝伝説のなかに史実を読みとる研究を試みており、[1]本稿も一連の研究の一つである。

一　長城伝説と杞梁伝説の結合

さてすでに漢代には、秦の民衆が長城建設の労働に苦しみ、政府に反発したことが秦王朝を崩壊に導いたという伝説が見られるが、孟姜女のようなヒロインを登場させるような長城伝説はまだ生まれていなかった。すなわち『淮南子』人間訓に

秦皇録図を挾み、其の伝を見るに、「秦を亡す者は胡なり」と曰うなり。因りて卒五十万を発し、蒙公・楊翁子に將いて城を築き脩めさせ、西は流沙に属ね、北は遼水を撃ち、東は朝鮮に結ぶ。中国内郡は車を輓きてこれに餉る。

とあり、胡（匈奴）が秦を滅ぼすという予言書の出現によって始皇帝は五十万の兵を北方に送り、蒙恬と楊翁子に長城を築かせた。そのための軍糧輸送の負担が全国に及んだという。ここでは北の匈奴戦と同時に南の百越との戦争の負担を併記したあと、

此の時に当りて、男子は農畝を脩むるを得ず、婦人は麻を剡ぎ縷を考するを得ず。羸弱は服して道に格り、大夫は箕もて衢に会し、病者は養うるを得ず、死者も葬るを得ず。

とし、男子は耕作、女子も紡績に勤めることもできず、弱者は道に服役し、大夫は道で勝手に民の財を奪ったので、その結果秦王朝は崩壊に向かった。

是に於て陳勝大沢に起き、臂を奮いて大呼すれば、天下席巻して戯に至る。劉項義兵を興し随いて定むること、槁(かれき)を折り落ちたるを振うが若く、遂に天下を失う。禍は胡に備え越に利するに在り。城を築き脩め以て亡に備うるを知らんと欲し、城を築き脩むるの亡う所以を知らざるなり。

この『淮南子』に描かれた図式の原型は、秦が滅亡してから百年後に、秦滅亡を反面教師として取りあげて国家の存亡を淮南王に説く呉被のことばのなかにすでに見え、蒙恬が長城を築いたことが非難される。すなわち『史記』巻一一八淮南王伝に

蒙恬を遣りて長城を築かしむこと東西数千里、兵を暴(あら)わし師を露わすこと常に数十万、死者は数うるに勝(た)う可からず、僵尸千里、流血頃畝、百姓力竭(つ)き、乱を為さんと欲す者は十家に五なり。

とある。これは聖人の道を絶った秦を非難する文脈で語られたことばである。計り知れない死者の数、遺体は千里も連なり、流血は田畑にあふれるといった表現には、呉被の淮南王への弁論の表現として割り引いて理解しなければならない。

賈誼の曾孫の賈捐之が、度々反乱した南越の珠涯とは無意味な戦争をすべきでないことを前漢の元帝に建議したことばのなかでも、秦の戦争についてはつぎのように言及されている。

以て秦に至り、兵を興して遠攻し、外を貪り内を虚しくし、務めて地を広めんと欲するも、其の害を慮ばからず。然らば地の南は閩越を過ぎず、北は太原を過ぎず、而して天下潰畔し、禍は卒に二世の末に在り。長城の歌、今に至るまで未だ絶えず(『漢書』巻六四下賈捐之列伝)。

ここにいう「長城の歌」というものの具体的な内容はわからないが、おそらく秦の長城建設と対外戦争とを非難した民謡であり、前漢末には民間に伝わっていたようである。後漢の班固も

秦始皇即位すること三十九年、内に六国を平らげ、外に四夷を攘う。死人乱麻の如く、骨を長城の下に暴し、頭顱道に属ね、一日として兵無くんばあらず。是れ由り山東の難興り、四方潰て秦に逆く（『漢書』巻武五子伝賛）。

といい、秦を非難するために長城の下に犠牲者の頭蓋骨が連なっていたという表現を用いている。後漢末の陳琳の「飲馬長城窟行」の歌には、長城建設への不満のことばが、故郷の妻に宛てた書簡の形式で語られている。自分はいつ死ぬかわからない身に置かれているので、妻には再婚を勧め、つぎのように伝える。

男を生まば慎みて挙ぐる莫れ。女を生まば哺むに脯を用てせよ。君独り見ずや長城の下、死人の骸骨相撐拄するを（『玉臺新詠』巻一）。

再婚して男の子が生まれたら取り上げず、女の子が生まれたら美味しい食べ物を与えて養いなさい、長城の下には、労苦で亡くなっていった人々の骸骨が人柱になっているのが見えないか、という内容である。さきの「長城の歌」も、このような内容であっただろうと推測できる。

一方漢代には、こうした長城伝説とは別に斉の杞梁（字は殖）の妻の伝説が伝わっていた。劉向の『列女伝』によれば、斉の荘公（前五五四―五四八）が莒で戦死した杞梁の妻に戦地からの帰路に弔いのことばをかけたが、妻は夫が罪を犯したのでもないので途上の弔問は非礼であるとして拒絶したので、荘公は改めて家に赴いて礼を尽くした。杞梁の妻は身内もなく孤独になってしまったので、夫の遺体にすがって哭したところ、周りの者は涙を流し、十日後には城も崩れてしまうほどであった。結局彼女は淄水に身を投げ、貞女として知られることになったという。

その頌には簡潔に

杞梁戦死し、其の妻収喪す。斉荘、道に弔うも避けて敢えて当たらず。夫を城に哭せば、城これが為に崩る。自ら親無きを以て、淄に赴きて薨ず。

と述べられている。『春秋』左伝襄公二三（前五四九）年には、「斉侯帰り、杞梁の妻を郊に過ぐ」とあるので、この伝説の原型は春秋の故事にあった。

このように無名の民衆が長城建設の犠牲になったという長城伝説と、杞梁の妻の哭城伝説とは、背景の時代も内容もまったく別のものであった。このことは後漢の王充も両伝説を別々の箇所で言及しており、『論衡』巻二三調時篇に

蒙恬秦の為に長城を築き、天下の半を極めれば、則ち其れ禍を為すこと宜しく万を以て数うべし。長城の造を案ずるに、秦民多くは死せず。

といい、長城建設の犠牲者もさほど多くなかったと冷静にとらえる。一方同巻五感虚篇にも

伝書に言う、杞梁氏の妻城に向いて哭せば、城これが為に崩る。此れ、杞梁の従軍して還らざれば、其の妻これを痛み、城に向いて哭し、至誠悲痛、精気城を動かし、故に城これが為に崩るるを言うなり。夫れ城に向いて哭すると言う者は実なり、城これが為に崩る者は虚なり。…然らば杞梁の妻の城を崩す能わざること明らかなり。或は時に城適（たまたま）自ら崩れ、杞梁の妻適哭す。下世虚を好めば、其の実を原（たず）ねずして、故に崩城の名、今に至るまで滅びず。

とあり、杞梁氏の妻が哭したのは事実だが、城が崩れたのは虚言であり、哭したときにたまたま城が崩れた可能性があるという。

その後、魏晋南北朝時代に入っても民衆の長城伝説と杞梁の妻の哭城伝説とが結びつくことはなかった。『水経注』巻三に秦の長城建設と百越開拓の負担について、「昼警し夜作せば、民労りて怨み苦しむ」といい、晋の楊泉の『物理論』（秦漢諸子の説を集めた書で『平津館叢書』甲集六冊所収）という書を引用する。

秦始皇蒙恬を使して長城を築けば、死者相属ぬ。民歌いて曰く「男を生まば、慎みて挙ぐる勿れ、女を生まば哺むに餔を用てせよ。長城の下に見ずや、尸骸相い支拄するを」と。其の冤痛此の如きか。

民衆の怨声として、男の子は長城建設に駆り出されるので取り上げず、女の子だけを育て、長城の下には犠牲者の遺骨が人柱となっているのが見えないのかという。さきの陳琳の「飲馬長城窟行」の歌と同様の内容である。『意林』に引かれた文章では「蒙恬長城を築き、人苦しみに堪えず、白骨山積し」とか、「長城の下に見ずや、白骨相撑拄するを」とかと見える。しかしこの民謡を冷静に見れば、過去の始皇帝を非難するのではなく、始皇帝に託して現世の苦悩を怨んだ声として読み取れる。(2)

晋代干宝の『搜神記』巻十五には、秦始皇帝時の夫婦別離伝説ともいうべきものが見える。夫が南方の戦争に徴発された話であるが、始皇帝政治の犠牲になった人間が個人の名で登場する意味では、のちの長城杞梁伝説や孟姜女伝説へとつながっていくものとして注目される。概略を紹介すると、秦始皇帝のとき長安の人で王道平という者がいて、幼いときに容姿端麗の同じ村の唐叔偕の娘、幼名文楡と夫婦になる誓いを立てた。やがて王道平が兵役に徴発されて南国へ下り、九年間戻らなかった。娘はこの間、両親に迫られてやむなく劉祥の妻になったが、道平への気持ちがつのるばかりで、三年後に亡くなった。そして三年後に道平は帰還したが、娘の死を告げられると、墓地に赴いて悲しみを表わした。すると、娘の霊が墓を暴き棺を開くようにと告げた。最後に二人はようやく夫婦となれたという内容である。ここではさきの無名の夫婦間の書簡で語られた秦の政治への怨みが、より具体的に語ら

れている。

顧頡剛は孟姜女の諸伝説を時代と地域に分けて詳しく整理したが、杞梁氏の妻が孟姜女と呼ばれ、城が崩れる内容から、長城に徴発された夫の安否を尋ね哭すると長城が崩れる話に転化したのは、唐代のことであろうと推測している。[3] 唐代の『琱玉集』巻十二感応編には『春秋』の杞梁の妻の話とともに、『同賢記』という書を引用し、秦始皇帝の長城建設の犠牲になった杞良の妻の別の故事を並べている。後者の故事はつぎの通りである。

杞良、秦始皇の時、北に長城を築き、苦を避けて逃走し、因りて孟起の後園の樹上より入る。起の女の仲姿、池中に浴し、仰ぎて杞良を見、これを喚び問いて曰く、「君は是何れの人、何に因りて此に在り」。対えて曰く「吾が姓は杞、名は良、是れ燕人なり。但だ役に従い長城を築き、辛苦に堪えざるを以て、遂に此に逃ぐ」。仲姿曰く、「君の妻と為らんことを請う」。良曰く、「娘子長者に生まれ、処りて深宮に在りて、容色艶麗なれば、焉ぞ役人の匹と為らん」。仲姿曰く、「女人の體は再び丈夫に見わすを得ず。君は辞する勿れ」。遂に状を以て父に陳べ、而るに父これを許す。夫婦の礼畢り、良作所に往けば、主典其の逃走せしを怒り、乃ち打ちてこれを殺し、築城内に并す。起、死を知らず、僕を遣り、往きてこれに代えんと欲するも、良の已に死に、築城中に并せらるを聞く。仲姿既に知りて悲哽し、往きて城に向い号哭すれば、其の城当面一時崩倒し、死人の白骨交横して孰か是れなるを知る莫し。仲姿乃ち指の血を刺して以て白骨に滴して去る。若し是れ杞良の骨ならば、血流入す可し。即ち血を瀝らせば果して良の骸に至る。血径ちに流入し、これを将に帰葬せんとせしむるなり。

始皇帝の長城建設の課役から逃亡した杞良は孟起の家に逃げ込み、そこでたまたま池で水浴びしていた女の仲姿に出会った。二人が夫婦として結ばれた後、杞良は徴発された地に戻ったが、そこの役人に捕まり、殺されて長城の人柱となっていた。仲姿が長城に行き着いて、城に向かって号泣したところ、城は倒壊して中から白骨が出てき

たが、どれが夫のものかわからないので、仲姿は自分の指の血を一つ一つの骨に滴らせたところ、血を吸入した骨が杞良のものであったので、それを持ち帰ったという。

この杞良（梁）の妻の名は、『敦煌曲子詞集』には杞梁の妻孟姜女とあるから、秦長城と結びついた孟姜女伝説は、まずは唐代にさかのぼれる。そして『琱玉集』の引用した『同賢記』という書が、唐代よりさらに南北朝期にまでさかのぼれるとすれば、[4] 秦長城を非難する伝説と、杞梁の妻の哭城伝説とが結びついたのも、その時期と推測できる。

二　孟姜女伝説の舞台—碣石と秦碣石宮遺跡

さて山海関の孟姜女廟は明万暦二二（一五九四）年に再建される以前には、いつ創建されたのかは時期を確定しがたいが、『臨榆県志』によれば宋以前にまでさかのぼる。とするならば、現在の明代の山海関の長城の位置に孟姜女廟があるからといって、明代の山海関長城と孟姜女廟とを安易に結びつけることはできない。[5] 宋代以前にこの地に孟姜女廟が作られた理由は何であったのだろうか。前節でふれたように、長城伝説と杞梁伝説が接近して結びつき、孟姜女伝説が成立していった魏晋南北朝時期にこそ、孟姜女廟が山海関に置かれている理由を解く鍵がある。

近年この山海関付近では北斉（五五〇—五七七）の時代の長城の遺跡が確認されているので、孟姜女廟との関連が注目される。[6] 北方遊牧民の王朝が長城を築くことは、何ら不思議なことではない。すでに鮮卑が華北に建国した北魏は、北の柔然などの遊牧民族の侵入を防ぎ、代の都（山西省大同）を守るために長城を建設している。六世紀の北斉王朝は東魏高歓の子が文宣帝として立った王朝であり、とくに北方には突厥、契丹、柔然の勢力があり、長

城の建設に積極的であった。秦漢と明の統一王朝が建てた長城はよく知られているが、その間にはさまれた北斉の長城も、無視できないほどの規模を誇っている。まず五五二（文宣帝天保三）年、横槨嶺（現在の山西省離石県西北）から社平戍（山西省朔県西）にいたる四百数里の長城を建造し、つづいて五五五（天保六）年には、一八〇万人を徴発して幽州北の夏口（現在の居庸関南）から恒州（山西省大同）まで九百里の長城建設を行っている。五五七（天保八）年はさらに長城内にも内城を連ねていくことになった。西は山西偏関から泰戲山にいたる四百数里、中央は山西、河北両省の境界の部分二百数里、東は三堆戍の東から山海関にいたる二千数里である。[7] これより先に五五三（天保四）年文宣帝は巡行してこの山海関にある碣石山に登り滄海に臨んでいる（『北斉書』巻四文宣帝紀）。こうした北斉の長城建設は、当時の人々から見れば過去の秦の時代の建設よりも多くの労苦を感じ、長城工事負担への怨みがあったことは想像できる。長城伝説と杞梁伝説とが結びつく素地をここに見ることができよう。

この山海関は、渤海に面した碣石という重要な地でもあった。碣石は、伝説では夏の禹王が冀州を治めたときに通過し、碣石をめぐって海に入ったという。その後始皇帝、二世皇帝、前漢武帝と巡行の途上ここを訪れている。武帝に随行した司馬遷も現地で始皇帝の顕彰碑である碣石門の刻石を実見したらしく、『史記』秦始皇本紀には現存しないその文章が記録されている。漢代の人々はこの東の海に面する碣石という山のように聳える岩礁と、北辺長城の東端遼東の地とを明確に区別していた。[8] 北辺は匈奴の侵入に対する防衛線であり、東方は海の彼方の神仙世界への入り口であった。しかし魏晋南北朝時代になると、いつしか長城の東端と碣石とを混同する伝説が生まれ、碣石が岩礁であることも忘れられ、河北省秦皇島市西南昌黎県城北三キロにある六九五メートルの内陸の山が碣石山とされた。[9] 北魏文成帝や、さきの北斉文宣帝、唐太宗らが登頂し、東海を望んでいる。『水経注』巻三には、「臨洮自り起き、東は遼海に暨ぶ」とか、「始皇、太子扶蘇と蒙恬をして長城を築かしめ、臨洮自り起き碣石に至る」

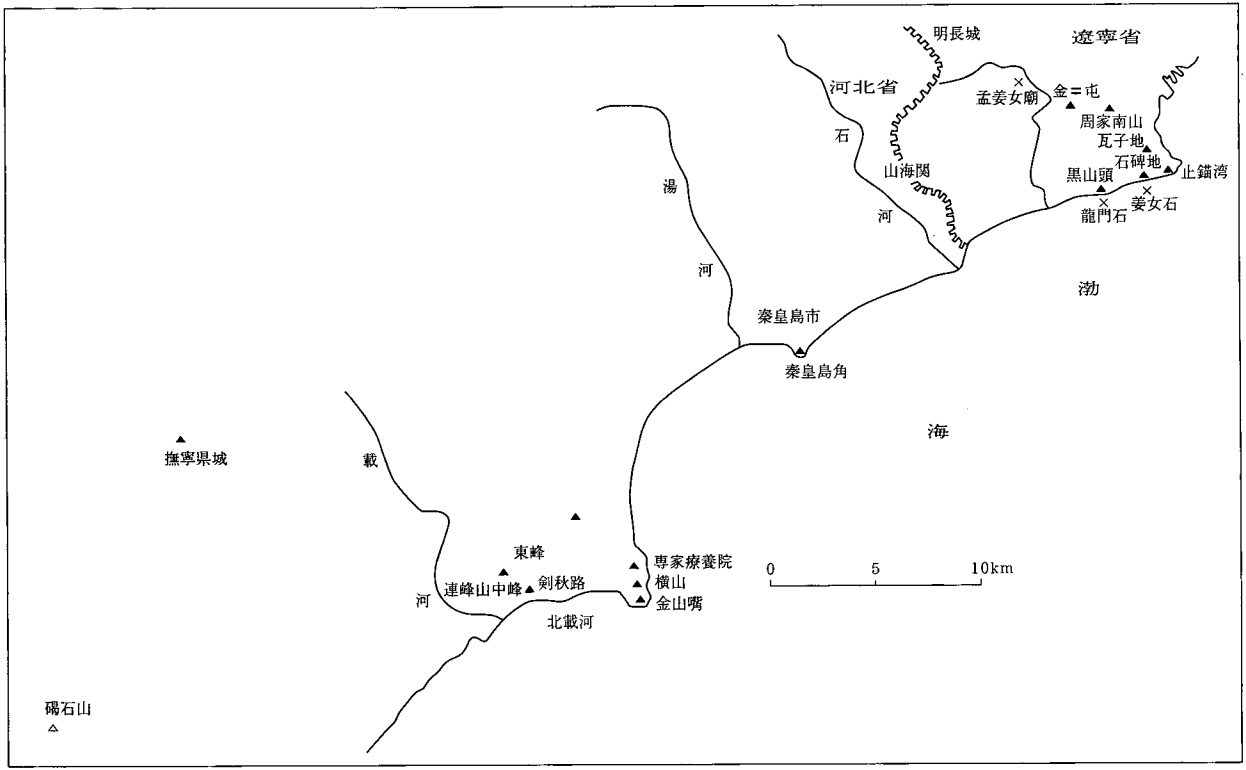

図1　秦始皇帝東方巡行離宮建築群遺跡

とか記し、『史記』の臨洮より遼東までという秦長城の記述が、臨洮より碣石までと変わってきている。すなわち長城の東端は遼東すなわち遼水の東から、碣石に変わってしまった。『晋書』巻十四地理志上の楽浪郡遂城県条に、「秦築く長城の起こる所なり」とあり、これは晋代の『太康地記』の「楽浪遂城県に碣石山有り、長城の起こる所なり」、「秦長城を築くは、碣石自り起こる」によっている。北斉はまさにこの碣石の地まで長城を築くことになった。

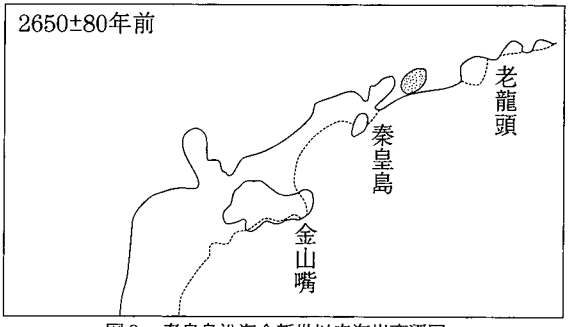

図2　秦皇島沿海全新世以来海岸変遷図
（孔繁徳『秦皇島地区新生代古地理若干問題初歩探討』より）

そのような過去の史跡の位置が時代とともに混乱されていくなかで、遼寧、河北両省境界の渤海沿岸に位置する秦漢離宮建築遺跡の発見は、ふたたび孟姜女伝説の舞台を秦の時代に引き戻してくれた。

秦漢代離宮遺跡の発掘は遼寧・河北の二つの省にまたがっているので、それぞれ別個に調査発掘が進められた。遼寧省側は一九八二年以降、石碑地遺跡、黒山頭遺跡、河北省側は一九八四年以降、金山嘴（きんざんし）遺跡、横山遺跡がそれぞれ調査、発掘された。全体の遺跡の様子を知るには両省の管轄区域を超えて、渤海沿岸約五十キロの広い範囲で調査内容を整理する必要がある。現在まで東は遼寧省綏中（すいちゅう）県止錨湾から西は河北省北載河の金山嘴までの範囲に、合計十七箇所の建築遺跡が発見されている[10]（図1参照）。十七箇所の遺跡は、金山嘴、秦皇島、黒山頭の三点を中心に分散している。この三箇所はいずれも海岸に突き出た岬であり、それぞれ海洋への見晴らしの好い場所である。古く溯れば、金山嘴、秦皇島の地名は、陸地から離れた島であったようである[11]（図2参照）。

孟姜女の古墳であるという伝説のある姜女石は、本来二つの岩であり、門闕のようにそびえ立っていたので碣石門と呼ばれた。現在は東側の岩の方は柱のように海面から二四メートルもそびえ立っているが、西側の岩の方は四、五つに砕かれ、横に倒れて伏しているように見える。この対岸の海を望む高台にある石碑地遺跡は、南北五〇〇数メートル、東西三〇〇メートル弱、十五万平方メートルにも及ぶ大型の離宮建築であることがわかった。南端の版築基壇は高さ八メートル、東西四〇メートルもあり、四―九センチメートルの版築層もきれいに残っている。この東北部の二号版築基壇の後方から、始皇帝陵の陵園建築に使用したのとほぼ同じ規格の直径五二センチ、高さ三七センチの夔紋大型瓦当が八件発見されたことは、東海に面した碣石宮の重要さを確認することになった。そのほか縄文瓦、雲紋瓦当、「千秋万歳」字瓦当、樹紋半瓦当、変形夔紋半瓦当、押印文字瓦片、大型空心磚などが出土しており、海に面した多層建築を中心にいくつかの宮殿建築から構成された秦漢時期の離宮であった。

この一帯は姜女石に限らず、沿岸には岩礁が多い。碣石の意味は本来そびえ立った岩礁のことであるから、姜女石以外も碣石と呼ばれた可能性もある。姜女石の西二キロの龍門石も門闕の形をした二つの岩礁で、その対岸の黒山頭という南北約一〇〇メートル、東西六〇数メートルの岬の平坦部の南端からも、瓦片、六三の礎石、版築台、大型空心磚の階段、排水管、円形貯蔵庫などの建築遺跡が発見された。東西四五メートル、南北二五メートルの範囲に版築基壇の上にのった建築があり、ここもやはり海を望む多層建築であることがわかった。前漢武帝の訪れた望海台と見られている。

もう一つの建築遺址は河北省側の北載河東の岬に専家療養院、金山嘴、横山の遺跡として南北に三つ並んでいる。金山嘴遺址はまだ発掘されていないが、石碑地と同じ大型夔紋瓦当の破片ほか、変形夔紋瓦当、雲紋瓦当、空心磚などが採集されている。発掘された横山建築遺跡は、面積約二万平方キロメートル、秦咸陽宮一号建築遺跡にも見

られるような井戸や方磚が出土している。「建陽」と刻字した陶鑑も見られる。石碑地や黒山頭などの遼寧省側の建築遺構のような高台の建築ではないが、始皇帝が前二一五年巡行の際にはここから東に碣石を望んだ離宮であると見られている。

三　秦離宮建設の意味

秦の離宮碣石宮と長城とは別個ものであるということを再認識する機会となった。文献には『史記』秦始皇本紀始皇三五年条に、「関中計るに宮は三百、関外は四百余」とあり、地方にはただ漠然と四百を越える離宮が造られたと伝えるが、その実態はまったくつかめていなかった。[12] それ以上の記述は、せいぜいこの数の多さを受けて、秦の奢侈を非難する後世のことばに見えるくらいである。『説苑』の「関中の離宮は三百所、関外は四百所、皆鐘声、帷帳、婦女、倡優有り」の文章はまさにその例である。離宮のなかでも始皇二八年三ヵ月滞在した琅邪台には三万戸の民が台下に移民させられたと伝えられ、現在でも琅邪山上に建築遺跡の版築の断面が見られが、離宮建築の遺構はまだ調査されていない。秦代離宮遺跡の発見と同時に、湖北省雲夢県龍崗秦墓発見の秦代竹簡法制史料は離宮と馳道、禁苑の関係を明らかにし、[13] もう一つの方向から秦代離宮研究の道が開かれた。始皇帝が前二一〇（始皇三七）年七月に急死した沙丘平台は、『史記』集解に引く徐広の説明のように戦国趙の武霊王が死去した沙丘宮であり、また『史記』正義にいうように始皇帝は沙丘の宮（離宮）で亡くなった。ここは戦国趙の都邯鄲の東北約八十キロ、旧黄河のほとりに位置している。戦国都城の邯鄲は入城した秦軍の破壊の対象になったが、沙丘の離宮は始皇帝も引き継ぐことになった。湖北省雲夢県龍崗秦簡には「沙丘苑中の風茶者…」（一九五簡）というものが見え、

沙丘には付属して禁苑（御苑）があり、秦代にも管理されていたことがわかった。禁苑はそもそも君主の狩猟地であり、そこには何らかの君主の滞在施設（離宮）があったので、始皇帝が死去したのもたんなる巡狩の途上ではなく、沙丘の離宮内であったことがわかった。司馬遷の時代には沙丘の離宮建築の基礎の版築台しか残されていなかったので、「沙丘の平台に崩ず」（秦始皇本紀）と述べたのであろう。

同じように旧楚都郢には秦の占領とともに南郡が置かれたが、その東南一帯は雲夢沢と呼ばれた。越の具区（太湖）、宋の鉅野（大野）、斉の孟諸（河南商丘）といった低湿の沼地とともに、覇者、王者の山川沼沢の利を生み出す国富の地と見られていた（『塩鉄論』刺権第九）。楚の荘王は雲夢で狩りをして、雉を射たというから（『説苑』）、楚王の遊猟区となっていた。[14] 前二一〇（始皇三七）年、始皇帝最後の巡行では都咸陽からまっすぐ雲夢に向い、ここで虞舜が祭られている九疑山方向を望祀している。祭祀をする以上、ここにも離宮が置かれているはずであり、離宮内の建物のなかで祭祀を行ったのであろう。龍崗秦簡にはやはり雲夢に禁苑があったことを示す竹簡が発見されている。「諸（およ）そ両つの雲夢の節を仮り、以て雲夢の禁中に到る者有るに及べば、灌を取るを得…」（二七八簡）とは、雲夢沢の禁苑に入る許可証の二枚の符節が合ったならば、動物の狩猟を許すという内容である。

前漢昭帝のときに開かれた塩鉄論会議で、賢良が富の不均衡を訴えたことばに、

> 是に於て数（しばしば）五嶽、濱海の館に巡狩し、以て神仙蓬萊の属を求む。数（しばしば）幸するの郡県は、富人貲を以て佐け、貧者は道旁を築く。其の後、小者は亡逃し、大者は蔵匿すれば、吏の捕索掣頓（せいとん）すること道理を以てせず。名宮の旁、廬舎丘落に苗を生やし樹を立つこと無くんば、百姓離心し、怨み思う者十に半有り（『塩鉄論』散不足第二九）。

とあり、始皇帝が巡狩の際に訪れた浜海の館、すなわち海辺に建てられた碣石宮、琅邪台などの離宮建築の贅とそ

の負担の重さを非難している。しかし五回にわたって全国を巡行した際に滞在した離宮が、政治的にどのような意味をもっていたのかというような問題関心はなく、もっぱら非難の対象となった。おそらく秦にとっては六国の地を抑えるために重要視していただろうし、馳道という皇帝専用道路も、地方の郡県の間を結ぶのではなく、中央と地方の離宮を直結させようという構想から整備されたのであろう。前二二〇（始皇二七）年に、渭水北の咸陽宮から渭水南の信宮（極廟）、そして東の酈山まで垣根で遮断した甬道を造って繋げたというが（秦始皇本紀）、この構想は中央と関西（関外）の離宮を結ぶ馳道として拡大した。同年の「馳道を治む」という記事は、関中の甬道との対比で読むべきであろう。前漢賈山のことばは秦の道路建設の贅を批判したことばであるが、馳道の終点について「東は燕斉を窮め、南は呉楚を極め、江湖の上、浜海の観畢く至る」といっているのは、間違いではない。燕の碣石宮、斉の之罘・東観、楚の雲夢、呉の会稽といった海浜、江湖、山岳の旧戦国君主の離宮が、咸陽から放射状に延びた馳道の中継点や終点であり、始皇帝は巡行の際には、旧六国の都城ではなく、離宮を拠点としたのであった。碣石、之罘、東観、会稽には始皇帝を顕彰する刻石が立てられた。

おわりに

最後に以上の考察の成果をふまえ、いま一度全体の流れをまとめてみたい。孟姜女伝説などの長城伝説の展開とその舞台であった渤海沿岸の碣石における史跡の混乱には、関連性があることがわかった。すなわち無名の民衆の長城建設の労苦や犠牲を謡った伝説が、いつしか本来はまったく長城とは関係のない杞梁の妻が戦死した夫を悲しむ伝説に接近し、やがて一体化する孟姜女伝説が誕生した。その時期は唐以前、魏晋南北朝の後期であると推測さ

れる。そしてこの新しい伝説の舞台の一つ渤海沿岸の碣石という禹王の史跡が、秦漢代にはまったく長城と関係のない離宮碣石宮の地であったにもかかわらず、魏晋南北朝期には北斉などの長城の東端の地として見られるようになった。渤海の海岸に両立した岩礁の碣石門には、始皇帝の顕彰文が彫り込まれたが、始皇帝に反発する感情からその岩はおそらくは人為的に崩され今日にいたっているのであろう。魏晋南北朝期には本来の海辺の高台の離宮から神仙の東海を望む碣石の地は忘れられてしまい、それに代わって内陸の山岳の碣石山が碣石とされ、そこに登り頂上から東海を望むことが北魏、北斉、唐代の皇帝によって行われた。このようななかで、本来の秦碣石宮とはまったく関係のない、孟姜女廟と姜女石がこの地に置かれていくことになった。しかしながら歴史の記憶のなかに忘れられてしまった史跡は、近年の秦漢離宮遺跡の考古学的発掘によって蘇ったのである。孟姜女伝説の舞台をたどっていくと秦碣石宮に行き着いた。

秦史の研究にとっては、本稿のように後世の伝説を扱う考察は意味のあることである。なぜならば、すでに漢代より秦始皇帝は伝説化され、その伝説化した内容の記事が秦代のもっとも基本的史料である『史記』秦始皇本紀のなかに数多く挿入しており、伝説と史実の問題を考えることなくして研究を進めるわけにはいかないからである。

（学習院大学教授）

註

（1）拙稿「秦始皇帝諸伝説の成立と史実―泗水周鼎引き上げ失敗伝説と荊軻秦王暗殺未遂伝説―」（『茨城大学教養部紀要』第二六号、一九九四年）。

（2）「女を生まば…、男を生まば…、君見ずや…」の表現は唐代の杜甫が出征兵士の怨みを歌った「兵車行」にも見え、民謡の一つのパターンとなっている。秦の兵士は苦戦に耐え、犬や猫を追い立てるように徴兵されていく。「女を生まば猶お比隣に嫁するを得るも、男を生まば埋没して百草に随う、君見ずや青海の頭、

古来白骨人の収むる無きを」、すなわち女の子を生めば隣近所に嫁に出せるが、男の子を生んだら雑草のなかに埋もれてしまう。ほれ見なさいよ、青海のほとりに古来収める人もいない白骨が散らばっているのをと歌う。杜甫は過去の秦代の徴兵を語りながら、唐王朝の無益な軍事を批判している。

(3) 顧頡剛「杞梁妻哭崩的城」(『歌謡』周刊第九三号、のちともに『孟姜女故事論文集』所収)。唐代になって中国中部の杞梁の妻の故事が北部の長城と結び付き、またそれは唐代に徴発された民衆の怨念から生まれたという。顧頡剛『古史弁自序』(平岡武夫訳『古史弁自序』創元社、一九四〇年、のち『ある歴史家の生い立ち—古史弁自序—』岩波書店、一九八七年復刊)。ほかに「孟姜女故事的転変」(『歌謡』周刊第六九号、一九二四年)、「孟姜女故事研究」(一九二七年)あり、のちともに『孟姜女故事研究集』(民俗学会叢書之二、一九二八年)、『孟姜女故事論文集』(中国民間文芸出版社、一九八四年)、顧頡剛編著『孟姜女故事研究集』(上海古籍出版社、一九八四年)所収。そのほかの研究として、楊振良『孟姜女研究』(台湾学生書局、一九八五年)あり。また貴県教育局・貴県工農師範編『《孟姜女》是一株尊儒反法的大毒草』(広西人民出版社、一九七五年)は、文化大革命時期に儒教批判、法家・始皇帝評価の立場で孟姜女伝説を批判したものである。

(4) 鐘敬文「為孟姜女寃案平反」(『民間文学』一九七九年七月号)。

(5) 明代には成祖が人民の犠牲の上に長城を築いたので、明山海関を中心に孟姜女の故事が広まり、始皇帝を非難しているのは実は明の皇帝への恨みであったという。顧頡剛「孟姜女故事」(『顧頡剛読書筆記』第十巻)。

(6) 郭述祖『万里長城・山海関』(山海関文物保管所・北京出版社)。

(7) 謝鶴林『万里長城』(上海古籍出版社、一九九六年)。

(8) 顧頡剛「秦長城東端三説」(『顧頡剛読書筆記』第七巻下)。

(9) 拙稿「秦帝国の形成と東方世界—始皇帝の東方巡狩経路の調査をふまえて—」(『茨城大学教養部紀要』第二五号、一九九三年)。

(10) 遼寧省文物考古研究所「遼寧綏中県〝姜女墳〟秦漢建築遺址発掘簡報」(『文物』一九八六年第八期)、遼寧省文物保護與長城基金会・遼寧省文物考古研究所『遼寧重大文化史迹』(遼寧美術出版社、一九九〇年)、李宇峰「秦始皇東巡與秦代行宮建築群址的発現」(未刊行)、「姜女墳建築群址的年代、性質及其相関問題」(『北方文物』一九九一年四期)、河北省文物研究所・秦皇島市文物管理処・北戴河区文物保管所「金山嘴秦

代建築遺址発掘報告」(『文物春秋』一九九二年増刊、総第十五期)、「秦皇島発掘一処秦漢建築遺址」(『中国文物報』一九九二年七月五日)。なお日中古代史セミナー「秦の始皇帝とその時代」のために一九九五年一月に来日した遼寧省文物考古研究所李宇峰氏からは、最新の発掘成果を直接伺うことができた。しかしながら残念ながら準備された報告は、一月十七日当日阪神大震災に遭遇したために日の目を見ていない。

(11) 『秦皇島港史(古、近代部分)』人民交通出版社、一九八五年)。

(12) 徐衛民「関中以外秦離宮別館述論」(『秦文化論叢』第二輯、西北大学出版社、一九九三年)。

(13) 梁柱・劉信芳「雲夢龍崗秦簡綜述」(『江漢考古』一九九〇年三期)、同「雲夢龍崗 秦代簡牘述略」(『簡帛研究』第一輯、一九九三年)、劉信芳「秦簡的発現及劉崗秦簡牘簡介」(日中古代史セミナー「秦の始皇帝とその時代」名古屋、一九九四年十一月二六日、のち鶴間和幸訳「秦代竹簡の発見—湖北省龍崗竹簡—」『日中文化研究第一〇号長江文明II』勉誠社、一九九六年)、劉信芳・梁柱編著『雲夢龍崗秦簡』(科学出版社、一九九七年)。

(14) 譚其驤「雲夢與雲夢沢」(『長水集』下、人民出版社、一九八七年)。

The Legend of the First Qin Dynasty Emperor's Great Wall and Its Setting: Linking the Jieshi Palaces to the Mengjiangnü Legend

Tsuruma Kazuyuki

To the northwest of the city of Qinhuangdao 秦皇島 in Heibei Province, in Wangfushi 望夫石 Village on the provincial border with Liaoning 遼寧 stands the mausoleum of Mengjiangnü 孟姜女. According to the legend, Mengjiangnü is a tragic heroine who lived during the early days of the Qin Dynasty. Soon after marriage her husband was conscripted to work in the construction of the Great Wall. Concerned about his welfare, she followed him to the construction site and found that he had been killed in a cave-in. While she wept, they found her husband's remains in the rubble, and she then returned home with the body. However, Mengjiangnü's mausoleum is actually situated on the site of the Ming period Great Wall, while the Qin period Great Wall is located much farther north, clearly indicating that the legend is not from the Qin period. Indeed, legends of later eras not directly connected with the Qin period are not very helpful as historical source materials for its study; however, the situation changed greatly when in 1982 on the seashore across the water from the Jiangnüshi 姜女石 the remains of a large cluster of remote palaces from the Qin and Han periods were unearthed. The purpose of the present article is to trace more systematically the development from the Great Wall legend to the Mengjiangnü legend in an attempt to discover historical facts about the Qin period from folklore of a later era.

The investigation reveals that the development of such Great Wall folklore as the Mengjiangnü legend is connected to confusion concerning historical sites that from its setting in the Jieshi 碣石 peaks on the Bohai seacoast. That is to say, legends lamenting the hardships and casualties suffered by the anonymous masses who built the Great Wall were originally derived from tales of the wives of Qiliang

杞梁 who lost their husbands in battle. The author estimates that the change of setting from the battlefield to the Great Wall and the creation of the Mengjiangnü legend took place in pre-Tang China during the latter part of Wei and Jin eras of the Northern and Southern Dynasties period. Furthermore, the geographical location for the new legend, Yuwang 禹王 site in the Jieshi peaks on the Bohai seacoast, despite being a cluster of remote palaces completely unrelated to the Great Wall built during the Qin and Han periods, is situated on the eastern edge of the Great Wall of the Northern Qi Dynasty of the Wei and Jin eras of the Northern and Southern Dynasties period. Jieshimen 碣石門, formed by two rock shoals on the Bohai Coast, was inscribed as a monument to the first Qin emperor, but was later destroyed on purpose probably as an act of rebellion against the emperor. During the Wei and Jin eras of the Northern and Southern Dynasties period, the original Jieshi peaks, from which residents of the remote palaces high above the coast could look out on the mystical eastern sea, were forgotten, and replaced by towering inland Jiehi peaks climbed by emperors of the Northern Wei, Northern Qi, and Tang Dynasties to view the eastern sea. It was in this way that the Mengjiangnü mausoleum and Jiangnüshi came to be located on the Bohai Coast with no relation what so ever to the original Jieshi palaces of the Qin period. Nevertheless, a historical setting forgotten in the historical record has been revived by the archeological excavation of the Qin and Han period Jieshi palaces on the Bohai Coast.